

本研究では、従来から物語文学の装飾的または周縁的な要素と見なされてきた平安時代の物語における笑いの重要性を再評価した。特に、『源氏物語』に先行する現存最古の長編物語とされる『うつほ物語』を通じて、笑いが平安時代の物語文学の発展において、どのような役割を果たしているのかを考えるのを目標とした。

ミハイル・バフチンの理論を基に、笑いが単なる娯楽を超え、文学における根本的な要素であるという視点から平安時代の物語における文学の発展と笑いの役割を初めて深く探究した。笑い、特にその両面価値性を、多数多様な人物や複数の声、複数の調子を組み合わせる場とする方法として考えられた。「笑いと暴力」、「笑いと批判精神」、「笑いと言説の論理」といった三つの主要な軸を通して『うつほ物語』における笑いを検討した。

第一章でミハイル・バフチンの『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』で定義された両面価値的（アンビバレント）な笑いの理論を説明した後、第二章では、祝祭の場における笑いと言説との関係を分析した。『うつほ物語』を「祝祭文学」として分析した研究の中で、上野の宮の挿話がカーニバルの状況を表す典型的な話と見做されてきた。無頼の者たちが偽のあて宮を略奪する場面は、混乱と狂奔、音楽、開放的な笑いにあふれる『うつほ物語』の祝祭の世界としての特質をよく表すと言えるが、このカーニバルの状況を『うつほ物語』に限らず、『落窪物語』にも見られると指摘し、より広く混乱と狂奔にまつわる笑いが平安時代に発展する開放的な文学の特徴ではないだろうかという問題意識を得た。両物語では、笑いと言説が緊密に関連しているが、『落窪物語』では笑いが暴力に貢献している要素であるのに対して、『うつほ物語』では笑いは暴力を追い出し、紛争を解決する要素である。さらに、祝祭の場での笑いが権力関係を逆転させる装置であることも見られた。『落窪物語』で道頼の復讐に登場する笑いが落窪の君を虐めた北の方を罰することを目指し、北の方がいじめめる者から虐められる者へ逆転する機能として使われている。一方で、正頼の権力を再肯定し、上野の宮の権力を否定する。正頼と上野の宮との権力関係の逆転が上野の宮の想像の中だけにあることにより、上野の宮の挿話では正頼の世界と上野の宮の世界という二つの現実が共存しており、より複雑であることが明らかになった。

第三章では、吝嗇家であるゆえに人々に批判され、揶揄されると同時に作者の批判の代弁するよう見える三奇人の一人である三春高基というその道化者の両面価値的な位置を分析した。三春高基は、貴族の華美な消費生活の欠陥を明らかにする者でもあるとともに、吝嗇のために親の遺言を破った者であり、任国の徴税権により巨富を蓄えた者である。高基の両面価値性は、人物の性格描写に限らず、物語の批判言説にまで及ぶと捉えてきた。一方で貴族社会に合わない粗末

な高基の生活を批判する支配的イデオロギーがある。もう一方で、人民の搾取の上に成り立つ貴族の生活を批判する高基の経済至上主義がある。こうして、高基の批判は、自立し、融合していない複数の声や意識の場となると考えた。物語に特別な立場ゆえに烏滸な人物が貴族社会を描き出す物語全体の論調（支配的イデオロギー）に反対する複数の言説、声を導入する可能にする方法として捉えてきた。第三章では、三春高基が貴族社会を批判するとともに、自らは社会批判の対象であるという両義的な人物であることがわかった。三春高基は社会に嘲笑される吝嗇家でありながらも、同時に優れた政治家でもある。この両面価値性が発言内容までにみられることがわかった。経済主義の面では、貴族社会の消費生活についての三春高基の批判は常識的で説得力のある発言であるが、『うつほ物語』で描かれている貴族社会の世界の面では異質的な、奇妙な発言である。三春高基の言葉が経済主義の面では説得力のある発言であるとしても、『うつほ物語』で描かれている貴族社会の現実とのやや離れていることも無視できない。三春高基が笑われる人物であるからこそ可能な発言内容とみなせる。しかし、同時に大臣まで登った三春高基を異常的な人物だけに定義できない。この両面価値性が物語にいくつかの解釈をもたらす方法であるといえよう。三春高基のエピソードの分析を通じて、『うつほ物語』は断片的な作品であり、統一された世界を表現しようとするものではなく、むしろいくつかの声が互いに反対し、対立する世界を表現しようとしていることに注目した。

第四章では、作者に近い社会環境に属していると考えられる藤原季英という登場人物を分析し、『うつほ物語』の言説の論理における笑いの役割の問題を深めたてきた。藤英は窮迫しているために周囲に蔑まれている人物であるが、いじめの対象となった藤英が、語り手及び読者の笑いを誘うということになると言えるだろうか。

三春高基と同く、藤原季英は人々の笑いの対象となるが、藤英の物語において、藤英に対する笑いが、いじめに関与する暴力的な行動であることを明らかにした。

その笑いは、貧困に苦しむ藤英を勸学院から排除することのみを目的とした笑いであり、虐待に対する読者の同情を誘う。虐待の主要素である笑いは、残酷な表現になっている。しかし、藤英の物語の当初、破壊の機能を担っていた笑いは、正頼邸の場面では藤英の能力を認めることを導いて、藤英は栄達へ向かうことになり、人物再生のベクトルとなったと言える。言説の面では藤英の物語も藤原氏の勸学院制度に対する風刺的な物語として読めるだろう。藤英の物語では、藤英を笑う者こそが、笑いの本当の対象ではないかと考えた。藤英に対する笑いは不公正の制度を反映しながら藤原氏の勸学院制度の没落を表現する方法になる。

こうして、第三章と第四章では、『うつほ物語』の三春高基と藤英の登場人物を通して、二つの異なる社会な批判を検討した。その二人の人物は周囲の人々から嘲笑される人物であるが、それぞれが社会批判の異なる複雑な側面を表している。

三春高基は正頼の権威と貴族社会のイデオロギーに対抗する。彼は誰からも嘲笑されているが、

貴族社会の欠陥を強調するためにその吝嗇家の視点で周囲の人々を批判する人でもある。三春高基、社会に対する説得力のある批判を発言するが、その吝嗇家ゆえに滑稽な役割により、批判は曖昧で解釈の余地がある。三春高基の社会な批判は適切であるのか、それとも三春高基の喜劇的な役割の一部にすぎないかという問題が出てくる。

藤英も周辺に嘲笑される人物であるが、三春高基とは異なり、社会を批判しない人物である。奇妙な服装を通じて時に滑稽に描かれているが、藤英に対する勸学院たちの笑いは、彼が耐えている不平等な虐待に対する同情と憤りを帯びている。藤英は虐待に対する無力な被害者として現れる。藤英の物語では、批判の対象は嘲笑されている者ではなく、笑う者であるといえよう。攻撃的で不平等的な笑いは勸学院の不平等の制度を強調する手段となる。この二人の登場人物の話においては社会な批判は、異なっている二つの方法で表現され、この作品で豊かさと複雑さを示している。

『うつほ物語』における笑いの分析上で、笑いが物語文学の発展における創造的な力であることが明らかになった。笑いが社会における人物の多様な表現を促進すると同時に、社会に対する言説の開放にも寄与していることが観察された。物語は均一な視点から離れ、雅や色好みの理想から逸脱する様々な人物を描き出す多様な世界へと向かっている。これらの人物は、周囲の世界に対する独自の視点を持つ発信者となっている。

『うつほ物語』は複数の批判的言説、複数の声、言語が融合している場と見なされた。本質的に反逆的で非伝統的な笑いは、物語の革新を促進するだけでなく、言語の新たな限界を探求し発展させる手段ともなっている。笑いは、仮名の書き方を通じて言語が獲得した新たな自由を象徴しているといえよう。